ガダルカナル補給戦の実相
――日本側の視点から――

齋藤　達志

＜要旨＞

ガダルカナル島の戦いを補給という視角から、なぜ「餓」島とよばれることになったのか、その実相はどうだったのかに焦点を絞り、主に日本側の視点から体系的に明らかにすることが本稿の目的である。ガダルカナル島の戦いは、海岸堡の攻防をめぐる日米の戦力集中競争という特性があった。当初、日米の戦力がほぼ伯仲しているとき、日本軍はガダルカナル島への海運地を含む補給線を構築し、大きく3回の輸送船団をもって部隊及び軍需品をラバウルからガダルカナル島への輸送を試みた。しかし、いずれも失敗し、制海権、制空権も失う。これ以降、高速の駆逐艦及び潜水艦による輸送にかわる。これらには重戦力となるような補給品は積載することができず、生存するための糧食が主に輸送されることになった。しかし、ガダルカナル島では機械力がないため人力で揚陸し、人力で第一線まで糧食を輸送する必要があった。

はじめに

ガダルカナル島の戦いは、先行研究も多く、最近では秦郁彦が「ガダルカナル戦の起点と終点」[1]で再検討している。しかし、日本軍のガダルカナル島への補給については、同島を「餓」島といいかえるほど補給の不備を強調するものはあっても、実際になぜ補給が不十分となったのか、実相はどのようなものだったのか、について体系的かつ具体的に述べているものは見当たらない。よってガダルカナル島の戦いを補給という切り口で、なぜ「餓」島とよばれることになったのか、その実相はどうだったのかを、日本側からみた、①補給線[2]の構成、②米軍の航空勢力下にあるガダルカナル島への輸送、③ガダルカナル島内の局地輸送、という視点から、先行研究では使われていない

1　秦郁彦「ガダルカナル戦の起点と終点」『軍事史学』（第57巻第3号通巻227号、2021年12月）。
2　補給線とは、補給業務機関と補給手段、特に輸送及び蓄積との結合関係から一定の軍需品の流れの系列、補給線（兵站線）が生じる。この一連の組織を補給線という（海軍経理学校研究部「補給参考書（補給概論）昭和19.5.27」（防衛研究所戦史研究センター所蔵））。

防衛研究所戦史研究センター所蔵史料を用いつつ、体系的かつ努めて具体的に明らかにすることが本稿の目的である。

補給とは、軍がその使命達成上、必要な物資を充足する手段であり、さらに言えば、「必要な軍需品を必要な量、必要な時期に必要な場所に存在させる技術」、つまり調達、蓄積（集積）、輸送、配給（交付又は供給）等の手段を通じて軍需品を最も合目的に軍の需要に適応させるものと言える[3]。一方、「補給は戦務なり[4]」といわれるように補給業務それ自体は戦闘ではない。しかし第一次世界大戦以降顕著となった、作戦進行中において敵の妨害を排除して補給を継続する、敵の補給を妨害するなど数々の戦例は、補給は戦闘と一体であり単に戦務とみることは出来ないことを証明している。要するに補給はそれ自体一つの作戦行動と言え、軍事作戦と整合一体化されるものであり、ここに補給戦という概念が生まれるのである。

以下、ガダルカナル島の戦いにおける補給戦について、まず、ガダルカナル島の戦いの基本的構図を明らかにし、その上でガダルカナル島への補給について、大きく制海権・制空権が日米伯仲の場合、制海権・制空権を米が保持する場合に区分して論じていきたい。

1．ガダルカナル島の戦いの基本的構図と補給態勢

（1）　基本的構図

ガダルカナル島の戦いにおいて、日本軍は、ラバウルを基地として第 17 軍及びその補給物資を東南約 900km のガダルカナル島に輸送し、あわせて輸送を直接護衛する海軍及び航空部隊も主にここから出撃した。さらにこの輸送を掩護もしくは米艦隊の撃滅を企図する連合艦隊は、ガダルカナル島北方約 2,000km のトラック島に位置した。一方、米南太平洋戦域軍は、ニューカレドニアのヌーメアに司令部があり、その北方約 800km、ガダルカナル島から南東約 1,000km に前進基地、エスピリッサント島があった。つまりガダルカナル島は、日本軍基地ラバウルと米軍基地エスピリッツサントからほぼ同じ、約 900km という距離に位置し、日本軍と米軍がこの島の攻防戦に使用できる戦力も 1942 年 7 月の時点で日本側判断では日本軍（戦艦 12、空母（中型 4、小

3　海軍経理学校研究部「補給参考書（補給概論）昭和 19.5.27」。
4　戦務とは、軍隊を指揮統率し、軍隊の行動生存を経理し、補給を実施する等作戦実施に必要な諸要務及び警戒、航行・命令等の作成発布、報告の調整等の手続き諸要務の総称である（防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書陸海軍年表』（朝雲新聞社、1980 年）362 頁。）。

型 2))、米軍（戦艦 9、空母 3）[5] とほぼ伯仲していた。ただ異なるのは、米第 1 海兵師団が先にルンガ飛行場を占領し、不充分ながら海岸堡を設定していたことであった。

また、対地・対空火力に掩護され、飛行場及び補給施設などを含む海岸堡を有している米軍とこれを攻撃する日本軍によるガダルカナル島の戦いの基本的構図は、ルンガ飛行場への日本軍からの有効な砲撃を阻止し得る地域まで海岸堡を拡張しようとする米軍と、この拡張を阻止しルンガ飛行場を奪回しようとする日本軍との攻防であった。つまり海岸堡（O－3ライン）の争奪戦である。しかし、このような陸上における攻防戦を行うためには、日本軍と米軍双方とも敵に優越する砲兵、戦車などの重戦力及び各種補給品を海路によって、それぞれの根拠地から輸送する必要があった。

この輸送について、日本軍の行動を整理すると、ガダルカナル島へ重戦力及び補給品を複数の輸送船からなる輸送船団をもって送り込む場面が大きく 3 回あった。その第 1 回目（本稿では第 1 次船団輸送とする）は 8 月末における一木支隊第 2 梯団を上陸させるため、第 2 回目（本稿では第 2 次船団輸送とする）は 10 月中旬の第 2 師団総攻撃のため、最後（本稿では第 3 次船団輸送とする）は 11 月中旬の第 38 師団総攻撃のためである [6]。

5　淵田美津雄・奥宮正武『機動部隊』（学習研究社、2008 年）24–25 頁。
6　齋藤達志「ガダルカナル島をめぐる攻防――戦力の集中という視点から――」防衛研究所『平成 25 年度戦争史研究国際フォーラム報告書』（防衛研究所、2013 年）88 頁。

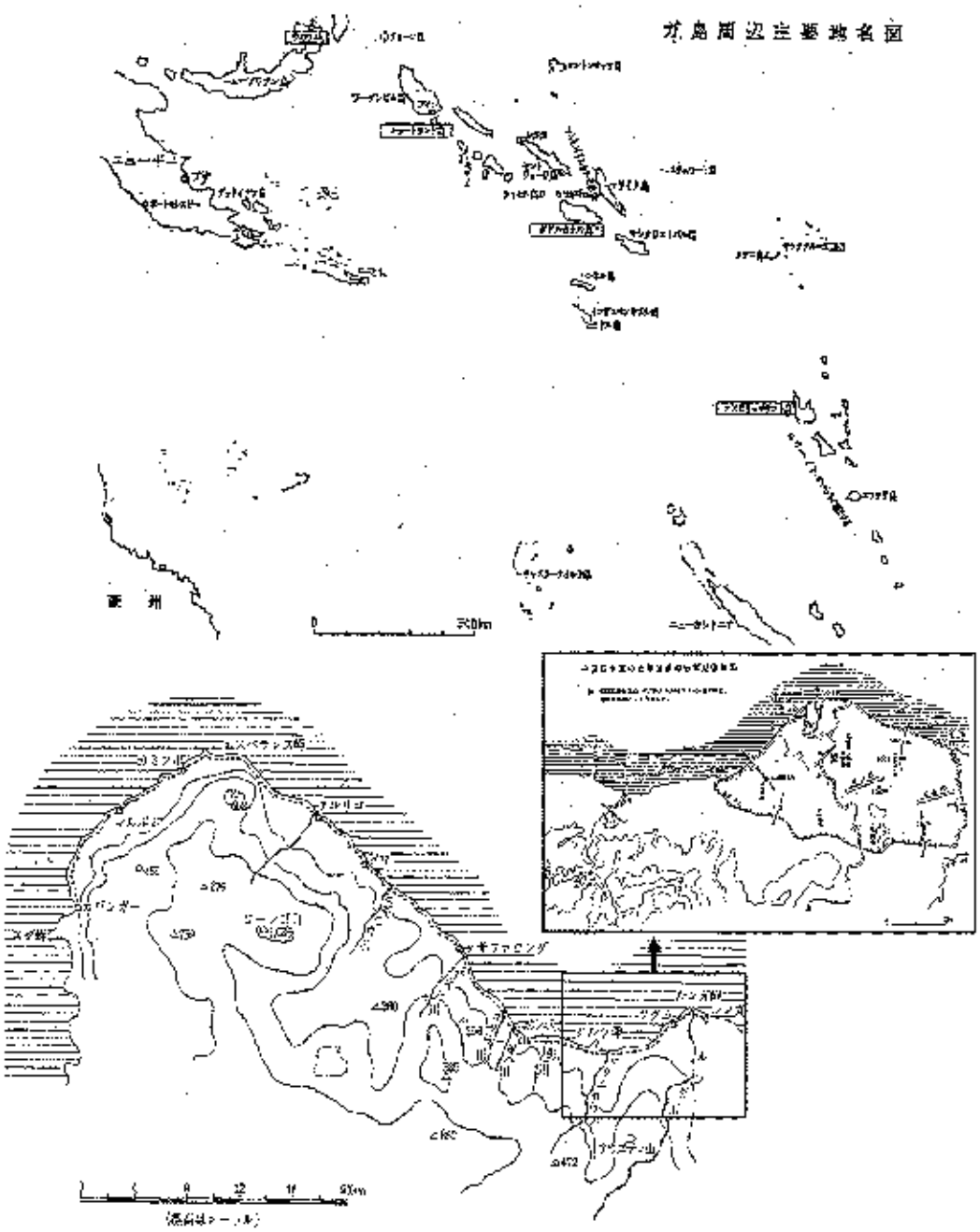

図1　ガダルカナル島一般図

（出所）防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦〈1〉』（朝雲新聞社、1969 年）。

（2）補給の態勢

ア　陸　軍

太平洋戦争開戦時の南方作戦の補給においては、台湾、南部仏印などの既存の補給施設を拡張、所要補給品を集積（蓄積）するなど事前に準備したため、格別の措置を要しなかった。

しかしガダルカナル島方面における作戦は、開戦当初の計画にはなかったため、補給面においても全く準備なく、敵制空権下における遠距離の輸送、特に海運地の整備、揚陸・搭載能率の向上、小型艦艇の輸送、特殊口糧の研究、マラリア対策、現地自給策等幾多の問題を克服する必要が生じた。このため、当初の補給は海軍に頼らざるを得なかった[7]。また、ガダルカナル島への輸送を担当する徴傭輸送船は、本土若しくは台湾などにおいて艤装、糧食の積み込みなどに約 1 週間を費やし、途中、部隊等を搭載し、約 5,000km ある遠路ラバウルまで約 1 カ月の航行が必要であった[8]。

イ　海　軍

連合艦隊は、ミッドウェー作戦に引き続き行われる予定であったフィジー・サモア（ＦＳ）作戦に備え各種補給品の集積（蓄積）をトラック島に実施した。特に貯蓄施設（重油タンク）の整備を実施し、5 万 t の艦船用重油を主体とする補給物資を集積した。またサイパンにおいても施設を整備し、同地を副補給基地として補給品の集積を実施した。当時、連合艦隊所属の補給艦船は、南方占領地区からの原油その他戦略物資を輸送していた関係から、トラック島を中心とする次期作戦物資の輸送には内地から海軍省配属の補給船も協力した[9]。こうしたことから補給船の航路は三角輸送と称せられるように複雑となり、貧弱な海上護衛力での護衛は難しく、補給船はその大部分を護衛なしで行動せざるを得ない状況であった[10]。開戦前、青島から曳船し、駆逐艦の入渠できる浮船渠もトラック島に整備した。この貯油施設と浮船渠は、じ後の作戦に寄与するところが極めて大であった。特にこの浮船渠は、ガダルカナル方面において損傷を受けた多数の駆逐艦を応急修理し、内地へ回航するなど連続的に利用された[11]。

7「昭和 16 年～ 19 年　大本営統帥概史（兵站）案」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）。
8　同上。
9　磯部太郎「太平洋戦争初期における海軍の補給並びに海軍運輸本部に関する回想」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）22–23 頁。
10　同上、26–27 頁。
11　同上。

2．ガダルカナル島への補給

（1）制海権、制空権が彼我伯仲の場合

ア　第 1 次船団輸送の実施

8 月 7 日早朝、アレクサンダー・アーチャー・ヴァンデグリフト（Alexander Archer Vandegrift）少将が指揮する第 1 海兵師団がガダルカナル島に上陸、同島所在の日本軍（主に飛行場設営部隊）を駆逐し、飛行場を含むルンガ岬一帯の狭小な地域を海岸堡として確保した。これに対し大本営は、陸軍の一木支隊（長　一木清直大佐、歩兵第 28 連隊歩兵 1 個大隊、連隊砲 1 個中隊、速射砲 2 個中隊、工兵 1 個中隊、通信隊、衛生隊等約 2,000 名）にグアム島での待機を命令（10 日、第 17 軍に編入）した。

9 日には、その海岸堡は飛行場を中心としてルンガ岬一帯の平原を囲むように構築されたが、東西約 7 km、南北約 4 km と狭く、完全に飛行場の安全化を図るというには強度はもちろんその大きさからもほど遠いものであった。ヴァンデグリフト少将としては、一刻も早く完全な海岸堡を確立するために増援部隊と武器、弾薬、各種資材、補給品等が必要であった[12]。

一方、大本営では、12 日になって陸海軍中央協定が成立し、そこで初めて陸海軍が協同してガダルカナル島を奪回確保することが決まり[13]、一木支隊と海軍陸戦隊で、速やかにガダルカナル島飛行場を奪回することとした。しかし、一木支隊の乗船していた輸送船 2 隻は速度が遅く、これでは戦機に投じることが困難であると考えられた。そこで先ず、速度の速い駆逐艦 6 隻で支隊本部、歩兵大隊を主とした約 900 名の人員及び歩兵砲 2 門を先遣隊として迅速に輸送し（第 1 梯団）、連隊砲中隊、速射砲中隊等の火力部隊及び各種支援部隊、補給品等は輸送船によって後から上陸（第 2 梯団、第 1 次船団輸送）させることになった。

第 1 梯団、第 2 梯団（第 1 次船団輸送）共に田中頼三少将指揮する第 2 水雷戦隊に護衛され、8 月 16 日、トラックを出港、第 1 梯団は 18 日夜タイボ岬（ルンガ岬東方約 30km）付近に上陸、第 2 梯団は、グアムから前進した横須賀鎮守府第 5 特別陸戦隊と合同し、輸送船 3 隻を以て 22 日、同じくタイボ岬に上陸する予定だった。連合艦隊は、これらを支援する名目で近藤信竹中将指揮する第 2 艦隊を前進部隊、南雲忠一中将指揮する空母「翔鶴」、「瑞鶴」、「龍驤」を有する第 3 艦隊を機動部隊として米

12 Major John Zimmerman, *The Gudalcanal Campaign* (Historical Division Headquarters ,U.S. Marine Corps, 1949), pp. 55–57.

13 田中新一「田中新一中将回想録　其の四（戦争第二期・第四章）」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）184–185 頁。

機動部隊撃破を目標として瀬戸内海を出撃させた[14]。翌 17 日、連合艦隊司令長官山本五十六大将も柱島からトラックに出撃、連合艦隊のほぼすべてが南東方面に集中された[15]。

一木支隊先遣隊は、18 日 21 時頃、妨害なくタイボ岬の泊地に入り、21 日未明、テナル川河岸から米海岸堡東側に突撃したが、猛烈な銃火を浴び失敗した。

イ　第 1 次船団輸送の失敗と駆逐艦（鼠）輸送の開始

8 月 24 日、第 1 次船団輸送の掩護を名目として夜明けとともに空母「翔鶴」と「瑞鶴」を中心とした機動部隊及び空母「龍驤」を中心とした前進部隊はガダルカナル島に向け南下を始めた。この時、米空母「エンタープライズ」「サラトガ」の 2 隻は、ガダルカナル島の東約 300km にあった。ここに第 2 次ソロモン海戦が始まる。機動部隊第 1 次攻撃隊は「エンタープライズ」に 3 発の 250kg 爆弾を命中させることが出来た。一方、米攻撃隊は、「龍驤」に集中しこれを沈没させた。

輸送船団は、24 日、機動部隊及び前進部隊が戦闘を続ける間、引き続き南下していたが、翌 25 日 06 時、ガダルカナル島から約 300km の圏内に入ったその時、ガダルカナル島から発進した米艦上爆撃機と爆撃機 B-17 が船団及び駆逐艦に爆撃を加えてきた。輸送船「神通」は火災を起こし、「金陵丸」も損害を被った。第 2 水雷戦隊司令田中少将は、このまま進撃を続ければ、艦船の全滅は必至であるとしてショートランド島に引き返して態勢を立て直すことにした[16]。ここに第 1 次船団輸送は失敗したのである。

ラバウルの第 11 航空艦隊司令部では、じ後の船団輸送について第 17 軍司令部と協議し、空母兵力の協力のもと速やかに輸送を再興するよう連合艦隊に打電した[17]。連合艦隊は、ガダルカナル島の基地航空兵力を制圧しない限り輸送船でのガダルカナル島上陸は極めて困難であるとし、じ後は輸送船から主として高速の駆逐艦による輸送（鼠輸送）を行うと連絡してきた[18]。

ウ　第 2 次船団輸送と補給線の構成

第 17 軍司令官百武晴吉中将は、8 月 19 日、歩兵第 35 旅団長川口清健少将に、自今、川口支隊 (第 35 旅団司令部及び歩兵第 124 連隊基幹）となり、海軍と協同して速や

14 宇垣纏『戦藻録　前篇』（日本出版協同会社、1952 年）154 頁。
15 防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書　潜水艦史』（朝雲新聞社、1979 年）180 頁。
16 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦〈1〉』330 頁。
17 陸戦史研究普及会『陸戦史集 22（第二次世界大戦史）ガダルカナル島作戦』（原書房、1971 年）64 頁。
18 宇垣『戦藻録　前篇』164 頁。

かにガダルカナル島を確保することを命令した。この頃大本営は、米上陸兵力は2～3,000程度と判断していたことから川口支隊の攻撃について楽観していた[19]。

川口支隊主力（歩兵第124連隊第3大隊基幹）は8月31日夜、ガダルカナル島タイボ岬のタシンボコ（ルンガ岬東方約30km）への上陸に成功、残りの部隊も9月7日までに上陸した。結局、8月31日から9月7日の間に延50隻の艦艇（駆逐艦）で輸送したのは、人員は陸海軍約5,600名、主要兵器は高射砲2門、野砲4門、連隊砲（山砲）6門、速射砲4門、糧食は総人員の約2週間分である。艦艇1隻当たりの輸送能力を計算すると、人員110名、主用火器0.3門、糧食2週間分であった[20]。これからもわかるように火力の骨幹である砲兵、戦車等は絶対的に輸送船による必要があった。

陸軍船舶司令部は、大本営が第2師団の派遣、その他の所要の部隊の増派を命令したことから、船舶兵団長桜田武中将に所要の幕僚を付して補給線上の海運主地[21]であるラバウルに派遣するとともに、船舶工兵連隊、揚陸隊を増加、さらにラバウルの重要性と同地港湾施設の不備に応じるため、所要の海運資材、給炭、給水、揚陸資材の前送に努めた。このラバウルの海運主地では、主として大型船輸送の補給・整備、積載物の揚陸及び搭載、軍需品などの集積（蓄積）などが出来る港湾施設等を開設する必要があった。一方、ラバウルとガダルカナル島の中間（ガダルカナル島北西約400km）に位置していた海運補助地となるショートランド島には第1船舶団長伊藤忍少将の指揮する船舶工兵2個連隊が所要の発動艇とともに前進しており、これが川口支隊の舟艇機動に任ずるなどした[22]。このショートランド島の海運補助地でも、主として大型船輸送と駆逐艦、舟艇などの小型艦艇輸送の中継点として、これら船舶の補給・整備、積載及び搭載、積み替え、集積（蓄積）などが出来る港湾施設を開設する必要があった。

当時のラバウル港においては、海運主地の施設としてはみるものもなく、港湾施設、特に荷役などの揚陸・搭載能力の増強は急務中の急務とされた。港湾資材の準備が未整備のため、やむなく船舶工兵連隊、揚陸隊の増強によって糊塗し、さらに給炭船、給水船を派遣するとともに舟艇修理のため工作船を急派したが、一時逃れの施策に過ぎなかった。これは数十隻の船舶をラバウル港に滞船させる原因となった[23]。さらに当

19 田中「田中新一中将回想録　其の四（戦争第二期・第四章）」192頁。
20 陸戦史研究普及会『陸戦史集22（第二次世界大戦史）ガダルカナル島作戦』87頁。
21 船舶輸送のため、海運基地、海運主地、海運補助地を設ける。海運基地は軍事輸送上枢要なる内地港湾に設け通常船舶輸送の策源地となし、海運主地は、外地主要の港湾に設け通常船舶輸送の端末における中枢地となす。海運補助地は海運基地または同主地以外において必要なる港湾にこれを設ける（『作戦要務令の便覧　綱領、総則及び第1部、第2部、第3部　昭17.3』（防衛研究所戦史研究センター所蔵））。
22「船舶作戦記録　其の2」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）。
23 同上。

時、宇品の船舶司令部では、南東方面の船舶輸送、特に第2師団、第38師団及び軍直轄部隊、兵站部隊輸送のため、船舶司令部直轄船の全力及び南方配当船の一部を抽出して船舶30万tを準備し、第2船舶団船舶工兵第2連隊、第3連隊及び第1、第2、第3揚陸隊及び船舶砲兵、船舶通信を南東方面に増派することとした[24]。

また、ラバウルからショートランド島までの廻転輸送に任じた輸送船は7～8隻で、当時はショートランド島までは順調に輸送が行われた。ショートランド島以遠、約400kmのガダルカナル島への輸送に任じた駆逐艦は約30隻で、当初は順調に行われていたが、9月下旬以降は月明かりの夜が多くなったことと海軍作戦の都合のため艦艇輸送も逐次困難となり、ショートランド島には輸送待ちの部隊、軍需品が集中する状況となった[25]。

川口支隊の攻撃は、9月13日20時を期して実施されたが、凄まじい米軍の火力に阻止され攻撃は頓挫した。

第17軍司令部は、10月20日頃、第2師団による総攻撃を予定し、そのため遅くとも10月11日頃にはガダルカナル島へ部隊及び補給品等の集中輸送を行う必要を認め、連合艦隊に要請した。結果、連合艦隊が、「主力でソロモン海域に出動して敵海空軍を牽制撃破しながら第2師団の輸送を同様に掩護し、なお有力な一部でこれを直接護衛する」こととなった[26]。連合艦隊司令部は、基地航空部隊のガダルカナル島攻撃、陸軍野砲による飛行場制圧射撃を実施させることはもちろん、兼ねて研究を進めていた高速戦艦による飛行場射撃を実施してガダルカナル島の基地航空兵力を制圧し、船団輸送（第2次船団輸送）を成功させようと企図した[27]。

10月4日、連合艦隊は、全般の作戦命令を発令し、第2次船団輸送は14日夜、タサファロング揚陸とした。この船団輸送は、高速力の優秀船を6隻（笹子丸、崎戸丸、佐渡丸、九州丸、吾妻山丸、南海丸）選定、防空火器を増強し、歩兵第16連隊主力、歩兵第230連隊（1個大隊欠）、10糎加農砲1個中隊、15糎榴弾砲1個中隊、高射砲1個大隊、独立戦車1個中隊、兵站部隊の一部、舞鶴鎮守府特別陸戦隊、弾薬、糧食等を輸送しようとするものだった[28]。この時、連合艦隊は、高速戦艦の主砲による飛行場への艦砲射撃を13日夜、巡洋艦による艦砲射撃を14日と15日に計画した。

当時、ガダルカナル島を中心とした約300km圏内の上空は、同島飛行場を根拠とする米基地航空部隊が制し、陸軍の補給等に任じる駆逐艦も同島の100浬圏内は日没

24 松原茂生『大東亜戦争における陸軍船舶戦史』（陸上自衛隊幹部学校、1970年）83頁。
25 同上、81頁。
26 同上、153–154頁。
27 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　南東方面海軍作戦〈2〉』（朝雲新聞社、1969年）168頁。
28 同上、80頁。

後進入し日の出前に脱出せざるを得ない状況であった。対して、日本軍のラバウル飛行場及びブーゲンビル島南端のブイン海軍機基地から出撃する戦闘機は、ガダルカナル島付近では滞空可能時間が約30分に過ぎず[29]、米航空部隊の制圧は困難であった。

エ　ルンガ飛行場の制圧と第2次船団輸送の失敗

第2次船団輸送の掩護のため、13日にはラバウルの基地航空部隊がガダルカナル島に対する攻撃を実施した。また、陸軍の野砲による砲撃もこれに加わり、地上にあった敵航空機の多くに損害を与えた。さらに第3戦隊の戦艦「金剛」、「棒名」の総計920発に及ぶ艦砲射撃が夜間、飛行場に対し実施された。飛行場は一面の火の海と化し、無数の誘爆を伴い、壊滅的被害を与えた。この日の米軍は、航空機約40機が破壊され、B-17の滑走路使用が制限され、大量の航空用ガソリンが流出するという損害を被った。

輸送船団は、基地航空部隊、外南洋部隊水上機の上空掩護のもと、ガダルカナル島を目指していた。14日は朝から4回の航空攻撃を受けたがいずれもほとんど被害はなかった。船団は予定航路を経て22時頃、無事ガダルカナル島タサファロングに入泊し、積荷等の揚陸を始めた。これを掩護するため第8艦隊司令長官三川軍一中将は駆逐艦等数隻でルンガ沖に進入、ガダルカナル島飛行場への艦砲射撃を行った。上空掩護は未明に水上機、次いで第2航空戦隊戦闘機、さらに基地航空部隊戦闘機という順序で行われた。

この時の輸送船からの部隊及び補給品等の揚陸は、朝ガダルカナル島の米航空機が飛行開始する前に終了するため、揚陸用に搭載した舟艇の卸下準備その他を完全にし、沖合100mあるいは数百mに投錨、揚陸時間の短縮に万全をつくした[30]。各輸送船搭載物の揚陸順序は、駆逐艦などで輸送困難な兵器、重材料などを第一夜天明までに揚陸完了し、その他は引き続き状況許す限り多くを迅速に揚陸できるように調整した[31]。また、輸送船1隻積載の補給品は約240tと見積もられ、陸上揚陸点までは、大発動艇（大発）6隻が輸送船と陸上揚陸点を4往復（1隻10tとして240t）する必要があった[32]。この輸送船から洋上にある大発への軍需品等の積載、陸上への卸下は一部船の揚貨機（デリック及びクレーン）を使用するが、主は人力であった。

第1船舶団長伊藤少将は状況最も困難な場合においても15糎榴弾砲、10糎加農砲、戦車の各約1中隊を搭載した佐渡丸1隻のみだけでも無事上陸させ、重要資材の揚陸

29 伊藤忍「昭和二十年十一月　大東亜戦争間の船舶作戦について」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）。
30 同上。
31 同上。
32「『ガ』島作戦の教訓　住谷悌史資料」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）。

を成功させようとし、自ら佐渡丸に乗船した。そして航海間においては、乗船部隊、揚陸作業部隊（船舶隊）及び船長との協定に基づく揚陸計画に所要の修正をし、特に重要船倉の揚貨機等の点検をするなど泊地進入後の迅速な揚陸開始並び第一夜での重要資材の揚陸完了に万全を期した。こうして 15 日午前 8 時頃までに重砲及び戦車などの重要兵器及び資材を揚陸することが出来た。その他の輸送船もまた敵機の来襲がないことを幸いに夜暗を利用して揚陸を連続実施した[33]。大発は、戦車、重砲等の揚陸・搭載にも適し、陸岸の達着、卸下、貨物の揚陸及び搭載作業等すべての点において使い勝手がよく揚陸作業の主体となっていた。揚陸作業隊は敵機攻撃の間断を利用して揚陸を続行し、午前 9 時頃までに概ね主要資材の揚陸を完了した[34]。

こうして第 2 次船団輸送は成功したかのように見えたが、米航空機は 15 日未明から数波にわたり襲撃を繰り返した。最初に笹子丸が被爆し炎上を始めた。南海丸の荷揚げは早く 07 時頃には終了し、護衛隊指揮官の命令で離脱した。第 3 波の空襲は 10 時頃、B-17 が船団及び泊地警戒中の駆逐艦を狙い、吾妻山丸に爆弾が命中した。11 時頃の第 4 波の空襲は船団に加えて揚陸点が目標になるとともに九州丸が爆弾により大火災を起こし擱座した。この間、佐渡丸からの 15 糎榴弾砲、10 糎加農砲、戦車の各 1 個中隊の揚陸は完了していた[35]。12 時頃、船団は、一端、サボ島北方に向け退避、15 時以降、船団は三度反転し錨地に向かったが、再び空襲を受け、伊藤少将から「月明なるに付、入泊をやめショートランドに帰港せよ」との電報を受けた護衛隊指揮官高間完少将は、16 時頃、反転してショートランドに向かった。同じく連合艦隊も支援部隊に対して第 5 戦隊の飛行場砲撃任務終了後「反転北上せよ」と下令していた[36]。しかし、掩護が必要となったのは正にそれからであった。

輸送船 6 隻から揚陸された補給品は海岸に山を為していた。大発から卸下した補給品が放置されていたのである。卸下した補給品を速やかに海岸から離隔させ密林内に分散、掩蔽することは今次輸送の最重要事の一つであった。しかし、その運搬に要する人員が不足した。このため、第 1 船舶団長が乗船部隊全部を配属され、揚陸全般を指揮した。とはいえ、揚陸海岸に対する米軍機の銃撃は激しく、そのため離隔、分散するための運搬の困難は一層増大し、運搬未了のまま海岸近くに暴露集積した多くの補給品は 16 日の爆撃及び 17 日の米駆逐艦による艦砲射撃により多大の損害を被った[37]。また、揚陸及び警備のため船団が携行した大・小発及び警備艇等は揚陸間及びじ

33 伊藤「昭和二十年十一月　大東亜戦争間の船舶作戦について」。
34 同上。
35 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　南東方面海軍作戦〈2〉』84 頁。
36 同上、85 頁。
37 伊藤「昭和二十年十一月　大東亜戦争間の船舶作戦について」。

後の数日間、反覆して敵機の攻撃を受け、その大部を破壊された。その残骸は、揚陸海岸を塞ぎ、その後の揚陸作業を妨害した[38]。

同じ頃、第 17 軍司令部では、船団輸送が突入、八分通り揚陸が成功したとの報に歓喜していた。しかし、揚陸地点を実査した参謀の報告により、揚陸し得たのは、弾薬の 1~2 割、糧食の半分に過ぎないことを知った。これでは師団の攻撃準備に不安であったので、第 2 次輸送部隊（歩兵第 228 連隊）の他、追加の弾薬及び糧食等の輸送を海軍側に要求したが、連合艦隊からは、飛行場を占領しなければ再度実施に応じ難し、と一蹴された[39]。この段階で、第 2 師団は、人員約 2 万名、弾薬はわずかではあるが 15 糎榴弾砲 15 門、10 糎加農砲 3 門、軽戦車 10 両等となった。第 2 次船団輸送はガダルカナル島に突入したものの、陸上に揚陸した補給品の大半を失ったのである。

上陸した第 2 師団は、第 2 次船団輸送の失敗から、米海岸堡に対し密林内の迂回奇襲攻撃を余儀なくされ、さらに攻撃開始を 10 月 22 日から 24 日に延期した。第 2 師団は 24 日攻撃を開始したが 26 日になって、総ての正面で陣前に阻止されたことから第 17 軍司令官百武中将は、26 日 06 時、攻撃中止を命令した。

オ　制海空権の転換点、南太平洋海戦

連合艦隊の積極的作戦に使用し得る兵力の大部分がトラック方面に集中したため、必要な艦船用燃料を南方占領地域から輸送するようになり、その最初の隘路が南太平洋海戦であった。第 3 艦隊は、ガダルカナル島近海での米機動部隊との戦いに備え、当時トラックに貯蔵していた重油のほとんど全部を搭載した。一方でトラック島に繋留された連合艦隊旗艦の戦艦「大和」と「陸奥」は、前線から来る補給艦への燃料タンクと化し[40]、遊兵化していた。

10 月 21 日頃、第 3 艦隊の空母は、「翔鶴」「瑞鶴」「瑞鳳」、前進部隊に「隼鷹」の 4 隻であり、対する米海軍は、空母 2~3 隻、戦艦 2 隻、巡洋艦 6~8 隻と連合艦隊では見積もっていた[41]（実際には空母は、「エンタープライズ」「ホーネット」の 2 隻）。

10 月 24 日、南太平洋戦域軍司令官ウィリアム・F・ハルゼー（William Frederick Halsey, Jr）中将は、空母「エンタープライズ」と「ホーネット」を指揮するキンケード少将にサンタクルーズ諸島の北方海域に前進するように命じた。この態勢は、トラックからガダルカナル島に南下接近する日本艦隊の左側面を衝くものであった[42]。翌 25

38 同上。
39 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦〈2〉』88 頁。
40 宇垣『戦藻録 前篇』204 頁。
41 同上、268 頁。
42 E·B· ポッター（秋山信雄訳）『キル・ジャップス』（光人社、1991 年）274 頁。

日夕、第2師団の攻撃開始に合わせ、また南下せよとの連合艦隊命令により、南雲中将は指揮する機動部隊にガダルカナル島の北東900kmの地点から南下を指示した[43]。ここに南太平洋海戦が展開されることとなった。

10月26日、最初に日本機が空母「ホーネット」を攻撃し行動不能にさせた。第二波の攻撃では「エンタープライズ」に爆弾3発を命中させ大損害を負わせ、戦艦「サウスダコタ」と対空巡洋艦「サンジュアン」に損害を与えた。一方、米攻撃機は空母「瑞鳳」に大損害を与え、「翔鶴」には500kg爆弾4発を直撃させた。結果、機動部隊は、空母2中破、艦載機総計延173機のうち92機を失った[44]。第3艦隊はこの時、すでに相当量の燃料を消費し、駆逐艦はトラックまでの帰投用を除けば数時間の戦闘行動しか出来ない状況であった。当時曳船補給の経験と設備のある補給船でトラック方面に利用し得るものはなく、他方面から急派できるものも皆無の状態であった[45]。こうしたことから山本大将は、当面するガダルカナルの戦闘と、空母部隊の再建に備えて、各部隊の艦載機を「隼鷹」に補充してトラックに残し、損傷空母を含めた第3艦隊を内地に帰投させた。

機動部隊である第3艦隊は内地での整備と搭乗員の養成、訓練のため、後のマリアナ沖海戦まで出動することはなかった。つまり南太平洋海戦は日本の機動部隊の機能を約1年半の長期にわたり喪失させ、連合艦隊を攻勢の艦隊から防勢の艦隊へと転換させたのであった。日本の機動部隊不在の南太平洋における制海権、制空権は米軍へと移ったのである。

（2） 制海権、制空権を米が保持する場合

ア 第3次船団輸送と船舶輸送の隘路

第17軍司令部では、先の第2師団による迂回攻撃は第2次船団輸送が失敗したため、止むを得ず実施したものであり、新たに攻撃を再興する必要があると考えていた[46]。11月4日頃における第17軍の構想は、次期総攻撃開始を12月末と予定し、マタニカウ川方面から主戦力を統合して攻撃しようとするものだった。この頃のガダルカナル島に対する日本軍と米軍の輸送状況は次の通りであった。日本軍は、11月初旬、4回にわたり駆逐艦延20隻で第38師団長佐野忠義中将以下約4,200名、糧食、弾薬等を揚陸した。一方、米軍も11月初旬、延13隻以上の輸送船により新鋭の第8海兵連隊、

43 水交会「元海軍中将　草鹿龍之介談話収録　其2　昭和35.2」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）41頁。
44 淵田・奥宮『機動部隊』115頁。
45 磯部「太平洋戦争初期における海軍の補給並びに海軍運輸本部に関する回想」28–29頁。
46 小沼治夫「ガ島における第17軍の作戦」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）231頁。

第 147 連隊、砲兵部隊等、各種補給品を揚陸し、さらに 12 日にはアメリカル師団 182 連隊の一部が増援される予定であった。

連合艦隊は、アメリカル師団第 182 連隊の輸送船団をすでに 11 日から捕捉していたが、発見してもどのように撃破するか容易に良案を得なかった[47]。反対に、米軍が新たに配備した魚雷艇等をもって警戒強化したため、日本側は鼠輸送の実施すら次第に困難になっていった。そこでこのような窮状を打開するため、次期攻撃のため 1 回だけ一挙に大船団の輸送（第 3 次船団輸送）を 11 月中旬に決行することが陸海軍間で決定された[48]。

連合艦隊司令長官山本大将は、第 3 次船団輸送のガダルカナル島揚陸を 11 月 13 日と予定し、同島の飛行場砲撃予定は 11 月 12 日夜、参加輸送船は 11 隻とした。また船舶の不足にともない、人 3t、馬 9t の搭載基準（熱地では人 5t、馬 10t）を諸般の処置を施し超過して搭載した。11 月 9 日、支援部隊の空母「隼鷹」と前進部隊はトラックを出撃した。この時、連合艦隊は、先の南太平洋海戦の戦果を過大に見積もり、米海軍には行動可能な空母はないものと考えていた[49]。

当時、ラバウル及びショートランド島は大型輸送船の終末点として船舶が集中したが、特にラバウルは陸、海軍とも南東方面における策源地（海運主地）として艦艇が集中していた。11 月上旬におけるラバウル在港船は、狭い港内に輸送船 22 隻（陸軍 8 隻、海軍 14 隻）、軍艦 5 隻その他計 20 隻が碇泊中という状況で、敵機の空襲が連夜実施された。このため入港船舶の統制、揚陸・搭載能力の向上、港湾防空強化が喫緊の問題として浮かび上がっていた[50]。

こうした海運地の不備は船舶輸送の最大隘路を形成し、最も補給担当者を悩ますところであった。このため宇品の船舶司令部では、特に浮き桟橋、桟橋材料の前送を促進した。また現地の実状上、小型船舶の修理能力の増強を必要としたため、船舶工作船を派遣した。また船舶工兵、揚陸隊を増強するほか、現地軍においても作戦命令によって第一線部隊に港湾荷役を命じ、短切な揚塔の実施に邁進した[51]。

当時、内地―ラバウル―ショートランド間の陸軍に関する輸送は以下の状況であった[52]。

47 宇垣『戦藻録　前篇』224 頁。
48 同上、200–201 頁。
49 淵田・奥宮『機動部隊』122 頁。
50 松原『大東亜戦争における陸軍船舶戦史』83 頁。
51「船舶作戦記録　其の 2」。
52 松原『大東亜戦争における陸軍船舶戦史』83 頁。

①護衛力の欠如で運航率が低下し、さらに港湾能力不足で滞船が増加し、内地－ラバウル間の航海日数は 50 ～ 60 日に達した。

②このような状況からラバウル直航方式を改め、パラオを中継地としてラバウル方面とニューギニア方面を同地で仕分けることとした。ここにおいてパラオの重要性が増大し、所要の処置を行った。

③ 1942 年末頃になるとラバウル－ショートランド間も大型船の運行困難となったので、島から島、基地から基地への夜間航行に切り替えた。このため海上トラック、機帆船、漁船、を内地から回航し、また引き続き大発の追送に努めた。

④ラバウル－ショートランド島の港湾能力向上は以前から行われていたが、所要の増大と敵の妨害は能力の向上を上回り、滞船は増大し、被害船も続出した。

⑤港湾荷役の向上のため、陸上の兵団においても、軍命令によって作戦部隊を揚陸・搭載作業に使わざるを得ない状況で、これらは「短切揚塔作戦」と呼ばれた。

イ　第 3 次ソロモン海戦と第 3 次船団輸送の失敗

米軍は、暗号解読で日本軍が 11 月中旬に攻勢を計画していることを把握していた[53]。ハルゼー中将には、「我が補給線を掩護せねばならぬとともに、来るべき敵の攻撃に対して反撃を加える要がある」[54] という強い信念があった。こうした考えは彼の部下にも徹底されていた。11 日、ハルゼー中将は、ハワイで修理中ではあったが航行可能な空母「エンタープライズ」と戦艦「サウスダコタ」を直ちに出撃させるようトーマス ·C· キンケード（Thomas Casin Kinkaid）少将に命じた。日本側では、空母「翔鶴」の修理完成に 4 ヶ月、「瑞鳳」に 2 ヶ月を要しているのに対し、米側はわずか 20 日ほどで「エンタープライズ」を戦場に復帰させた[55]。

11 月 12 日夜、戦艦「比叡」、「霧島」の 2 艦は、第 10 戦隊と第 4 水雷戦隊に守られて、ガダルカナル島の北方から飛行場砲撃のため直路ルンガ泊地に向かって突入しようとしていた。サボ島を回った頃、ダニエル ·J· カラハン（Daniel Judson Callaghan）少将指揮する巡洋艦と駆逐艦部隊もそこに突入、両艦隊は突然暗闇の中で遭遇した。ここに第 3 次ソロモン海戦が生起した。各艦入り乱れての 30 分にわたる激戦の結果、戦艦「比叡」はレーダーを装備した米艦艇からの砲撃により 50 発以上被弾し、さらに「エンタープライズ」の艦載機は、執拗に「比叡」を攻撃し撃沈させた。また、14 日夜、戦艦「霧島」が再度の艦砲射撃を期してガダルカナル島に向かって南下したが、米戦

53 ポッター『キル・ジャップス』283 頁。
54 山賀守治訳『キング元帥報告書（上巻）』（国際特信社、1947 年）100 頁。
55 木俣滋郎『日本空母戦史』（図書出版社、1997 年）410 頁。

艦により撃沈された。わずか 3 日間で連合艦隊は戦艦 2 隻を失った。

弾薬、糧食、第 38 師団及び海軍部隊約 1 万 3 千名を積載した 11 隻の輸送船団は、第 2 水雷戦隊の駆逐艦 13 隻に護衛され、11 月 12 日、ショートランド島を抜錨、南東に向かった。当初、突入予定は 13 日夜であったが第 3 次ソロモン海戦のため一日延期し、船団はひとまず北方へ退避してショートランド島へ戻った。13 日 15 時頃、再度、南下した船団は、14 日朝、ニュージョージア島の北約 36Km まで来たところで、米軍の B-17 に発見された。目標は輸送船というハルゼー中将からの無線命令に応えて、B-17 は船団を攻撃し始めた[56]。「エンタープライズ」の艦載機とガダルカナル島の海兵隊機は、ともに次々と発進した。日本の輸送船 11 隻は、早朝から連続 5 回の爆撃を受け、7 隻が沈没又は落伍し、辛うじてルンガ泊地に突入したのはわずか 4 隻に過ぎず浜辺に擱座された。1 万名の陸兵の内、無事ガダルカナル島に上陸したのは僅か 4 千名、軍需品 5t、弾薬 260 ケース、米 1,500 袋に過ぎなかった[57]。

連合艦隊は、この海戦で機動部隊に続いて主力艦を失い、以降この海域に主力艦、さらには輸送船を投入することはなかった。第 3 次船団輸送が失敗したことにより日本軍によるガダルカナル島奪回を目的とした最後の攻勢及び輸送船による補給は失敗に終わったのである。連合艦隊は、第 1 次から第 3 次までの船団輸送を無事ガダルカナル島まで掩護することは出来なかった。第 17 軍司令部では、この船団輸送の大損害はガダルカナル島の命運を決した[58]と感じた。

この後、11 月 16 日、第 17 軍は、攻勢から防勢への任務変更を大本営から示された。11 月 19 日、ハルゼー中将は、危機を乗り越えソロモンの制海空権を獲得した功績が大きく認められ大将に任命された。この制海空権をもってガダルカナル島には続々と米軍の補給がなされていくのである。

ウ　ガダルカナル島内における局地輸送

米軍に制海権、制空権が移った以降、ガダルカナル島の第 17 軍は優秀な装備の米軍を阻止しつつ生存するための戦いを継続しなければならなかった。そのため第一線から遥か後方の地上部隊による攻撃が及ばないカミンボ付近を揚陸点として、夜間、隠密に輸送する各種輸送方式が工夫された。

駆逐艦による鼠輸送において、少しでもガダルカナル島での揚陸時間を減少するためドラム缶輸送が新たに実施された。駆逐艦に載せたドラム缶 50 個をロープで繋ぎ、

56 ポッター『キル・ジャップス』292 頁。
57 木俣『日本空母戦史』415 頁。
58 小沼「ガ島における第 17 軍の作戦」266 頁。

揚陸点の沖に投入し、朝の上げ潮で漂流させる方式である。この方式は、11 月 30 日に第 2 水雷戦隊の駆逐艦 8 隻で行われたが、揚陸開始の直前、米水上艦艇が出てきたのでドラム缶を捨てて海戦に移り失敗に帰した。12 月 3 日には成功したが、ドラム缶の陸地への引揚には多くの人員を必要とし、また、珊瑚礁にロープが絡まるなど多くの問題点もあり、収容されたドラム缶は三分の一程度にすぎなかった。その後も引き続き行われたが成果は微々たるものであった[59]。さらにドラム缶は、揚陸後の貯蔵には便利ではあるが輸送品目が限定され、分配が困難という欠点もあった[60]。またドラム缶の代わりにゴム袋を投入する方式も試みたがこれも成果は上がらなかった[61]。

11 月以降、敵航空兵力の増大にともない駆逐艦輸送は逐次減少し、これに変わり潜水艦輸送が実施された。第 1 回は 11 月 22 日実施して失敗、第 2 回は 11 月 25 日実施して成功し、じ後引き続き行われた[62]。ガダルカナル島作戦中後期における潜水艦による成果は良好であり、駆逐艦のドラム缶輸送が品目的に制限されるのに比し、多品目の糧食などの揚陸に成功した。特に末期において発明された「運貨筒」は、1 回 20t 内外の貨物輸送に成功した[63]。

運貨筒は、最も安全、かつ比較的多量の物資を運搬・揚陸するための手段として駆逐艦輸送より効果があった。運貨筒とは、揚陸点沖の水中で潜水艦から離脱させる物資輸送・揚陸用の特殊潜航艇であり、司令塔に一人の運転兵を乗せ自由に操縦できる点、海岸に達着して逐次搬出する点、敵機による発見困難な点など優秀な輸送方法であった。しかし人員及び大型兵器、重材料などの輸送は不可能であった[64]。

運貨筒輸送の準備ができず、かつ月明かりで駆逐艦はもちろん潜水艦の輸送をも不能であった 12 月末から 1 月上旬には航空機による補給が実施された。しかし、ガダルカナル島のような密林地帯が多い作戦地において投下された補給品は紛失するものが多く、僅少な投下量中、約四割程度を入手したのみであった。結局、航空機による補給は、小部隊にはある程度有効であるが大部隊には適さなかった。かつ密林地帯への補給はその消耗量（非回収）が多く、常続補給には適さなかった[65]。

特に島内の局地輸送において最も苦心したのは、第 17 軍が自ら行うカミンボなどの揚陸点である海岸から陸上の某地点までの運搬及び遮蔽であった。第 17 軍としては、

59 松原『大東亜戦争における陸軍船舶戦史』98 頁。
60 第二師団経理部「ソロモン『ガ島』戦に於ける給養補給の教訓」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）。
61 松原『大東亜戦争における陸軍船舶戦史』98 頁。
62 同上。
63 第二師団経理部「ソロモン『ガ島』戦に於ける給養補給の教訓」。
64 同上。
65 同上。

陸上に揚陸された補給品の内容は知る由もなく[66]、また、日の出までにこの処理（集積、仕分け及びその隠掩蔽）を終えることが出来なければ、敵航空機に発見されるのである[67]。

第 17 軍経理部長は、カミンボ揚陸点から前線に至る 60 数 km に、7、8 箇所の交付所を開設し、この運営のため貨物廠長以下をも合わせ陣頭指揮し、揚陸作業に集積、保管、舟艇による前送、交付等超人的な活躍を続け、給養の確保に邁進した[68]。ガダルカナル島作戦における交付所は、一部の山地密林内と大部分は海岸地帯とに分かれるも、その位置は、航空攻撃を回避するため分散集積に努めた。糧食などは、壕内に入れ、椰子葉で偽装しつつ海岸の椰子林内に集積し、事務所は集積所に近い通常 500 ～ 800 メートルを隔てる密林内に設けた[69]。

ガダルカナル島内の交通については、ただ一本の自動車通行可能路があるのみであり、これも最後方補給点であるカミンボまでは通じていなかった。揚陸された自動貨車は、第一線砲兵用のものであり、数回これを借用し、弾薬、糧食の輸送を実施したもののその効果は大きくはなかった。また昼間運行は対空遮蔽が不可能なため損害が多く、夜間輸送も一度大雨が降れば路面悪化し、著しい困難な状況に陥った。また、燃料不足のため、自動貨車の運行は極めて制限された[70]。

ガダルカナル島作戦を通し局地輸送において補給上最も活躍したのは、舟艇（大発もしくは小発）による揚陸点から交付所までの前送であった。舟艇 1 隻の輸送力は自動貨車より遙かに優れ、毎日の前送は大発 1 ～ 2 隻あれば常続輸送を概ね実施できるのみならず、1 ～ 2 隻による夜間輸送ならば敵に発見される恐れも少ないという長所があった。しかし夜間における舟艇による前送は、その積込み、卸下に多大の時間と労力と困難を要し、月明かり下における前送は敵魚雷艇及び夜間航空機により著しく制限を加えられ、前送計画の半分すら実施できない状況となった[71]。

ガダルカナル島内においてこれら交付所から最前線までの糧食、弾薬の輸送は臂力（ひりょく－人力）搬送によるしかなかった。揚陸時はもちろん作戦当初においてコカンボナまでの舟艇輸送が十分可能な時期においても、コカンボナからの前送、特に丸山道に沿う輸送は一切臂力搬送であった。前線にある各部隊の糧食、弾薬受領者は、エスペランスなどの交付所まで徒歩で前進して糧食、弾薬を受領し、再び前線まで臂

66「『ガ』島作戦の教訓　住谷悌史資料」。
67 同上。
68 同上。
69 同上。
70 第二師団経理部「ソロモン『ガ島』戦に於ける給養補給の教訓」。
71 同上。

力搬送を実施した。事実、ガダルカナル島内における補給は臂力によるものが最大であり、その功績は顕著なものがあった。

臂力搬送は、海岸道路以外昼夜間とも敵航空機を避け搬送可能であるがその運搬量は僅少、兵力多数を要し、かつ体力的な消耗が著しいのみならず搬送に多くの時間を要するなどの短所が多い。しかし、ガダルカナル島の特殊条件下においては最後の手段であり、これに頼らざるを得ない状況であった。臂力搬送のための多くの兵員の抽出は第一線の兵力に大なる影響を及ぼした[72]。特に11月以降、第一線兵力の損耗は増加し、さらにマラリアによる下痢、発熱患者等多発して戦力はますます減退し、糧食受領の兵すら差し出す余力もない状況に陥っていた。選ばれた糧食受領兵は、発熱、脚気などの病魔に耐え、とぼとぼと裸足に杖つき10里近い道程を踏破するのであった[73]。

一方、糧食、弾薬の補給すら円滑を欠く状況において、被服の補給もまた困難であり、二三梱包の夏衣、夏襦袢及び編上靴が輸送船から揚陸されたものの各部隊に交付するだけの所要量は到底なく、特に損傷激しい若干のもののみに交付した。また、需品類、事務用消耗品、懐中電灯、ローソク、マッチ、給養器具などは主として上陸時の個人携行により揚陸された[74]。

エ　揚陸した糧食の補給量

第17軍としての主食（精米）補給定量は、10月349g、11月433g、12月203g、1月236gとなっているが第一線部隊では絶食の時もあったという[75]。第2師団の場合、兵員一人に対する補給量は、10月14日以降600g、10月26日以降半定量となった。しかし実際の補給量は運搬力に支配され、わずか定量の三分の一程度が補給されたに過ぎない。副食においては調味料のほか定量の一割にも満たない程度であった。しかも現地自給物資が僅少なガダルカナル島においては、カロリー就中タンパク質、酵素、ビタミン、ホルモンの不足は、体力、特に病に対する抵抗力を弱め、かつ回復すべき病状を悪化させる原因となり、薬物不足はこれに拍車をかけた。一方、第38師団が12月中に受領した糧食は、1日六分の一弱の定量であったが、23日には皆無となり絶食が始まるという状況で、弾薬も欠乏し、衛生材料も届かず、患者の後送も思いもよらず、多くの将兵は、連日降り注ぐ雨にうたれて密林内にごろ寝しているという状態

72 同上。
73 同上。
74 同上。
75 第17軍経理部「『ガ』島に於ける糧秣揚陸交付数量調　住谷悌史資料」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）。

であった[76]。

12 月初旬には潜水艦輸送により相当多品目の糧食がカミンボ及びエスペランスに揚陸されたが、ただでさえ貧困な局地輸送力は敵の妨害、天候によりさらに減少され、前送糧食は主食、粉醤油を主体とし、ほかの糧食はむなしく残置される状況となった[77]。例え補給比率により揚陸されたとしても単に腹を満たしたいという欲求とガダルカナル島内の補給の前送状況は数品目に限定され、他を残置する結果となった。ここにおいても偏食の欠陥を明らかにするものであった[78]。

また、ラバウルからガダルカナル島に揚陸され、交付所に補給品が蓄積される比率は、作戦間平均して弾薬は輸送実施量の 18%、糧食（主食）は 14%、衛生材料は 27% であったが、ある時期は皆無のこともあった[79]。

次にガダルカナル島に揚陸（交付）された主食に関して、どの輸送手段による揚陸の効果が最も高かったのかを、次表「ガ島作戦における主食補給状況一覧表」からみるに、輸送実施に対する揚陸（交付）比率が 69%（輸送船 5%、駆逐艦 19%）ということで潜水艦が最も高かった。このことから史料「ガ島作戦の教訓」においては、「海洋作戦における補給は、海岸は潜水艦、陸上は装甲車をもって組織するを要す」と総括しているほどである。

76 松原『大東亜戦争における陸軍船舶戦史』98 頁。
77 第二師団経理部「ソロモン『ガ島』戦に於ける給養補給の教訓」。
78 同上。
79「『ガ』島作戦の教訓　住谷悌史資料」。

表1　ガ島作戦における主食補給状況一覧表

凡例：R－ラバウル、S－ショートランド、
万人日－一日に換算した場合延べ何万人分となるかを表したもの

<table>
<tr><td colspan="2">区分</td><td colspan="2">輸送船</td><td colspan="2">駆逐艦</td><td colspan="2">潜水艦</td><td colspan="2">その他</td></tr>
<tr><td rowspan="4">計画</td><td>地区別</td><td>R</td><td>S</td><td>R</td><td>S</td><td>R</td><td>S</td><td>R</td><td>S</td></tr>
<tr><td rowspan="2">小計</td><td>272</td><td>－</td><td>170</td><td>20</td><td>6</td><td>51</td><td>23</td><td>－</td></tr>
<tr><td colspan="2">272</td><td colspan="2">190</td><td colspan="2">57</td><td colspan="2">23</td></tr>
<tr><td>計</td><td colspan="8">542（単位：万人日）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">実施</td><td>地区別</td><td>272</td><td>－</td><td>110</td><td>20</td><td>6</td><td>36</td><td>21</td><td>－</td></tr>
<tr><td>小計</td><td colspan="2">272</td><td colspan="2">130</td><td colspan="2">42</td><td colspan="2">21</td></tr>
<tr><td>計</td><td colspan="8">465（単位：万人日）</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">揚陸（交付）</td><td colspan="2">14</td><td colspan="2">22</td><td colspan="2">29</td><td colspan="2">2</td></tr>
<tr><td>計</td><td colspan="8">67(65)（単位：万人日）</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">計画に対する揚陸（交付）の比率</td><td colspan="2">5%</td><td colspan="2">11.5%</td><td colspan="2">52%</td><td colspan="2">8%</td></tr>
<tr><td colspan="8">13%（12%）</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">実施に対する揚陸（交付）比率</td><td colspan="2">5%</td><td colspan="2">17%</td><td colspan="2">69%</td><td colspan="2">10%</td></tr>
<tr><td colspan="8">16%（15%）</td></tr>
</table>

（出所）「ガ島作戦の教訓」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）。

まとめ

これまで述べてきたように、日本軍は、ガダルカナル島奪回のため、ラバウルからガダルカナル島の第一線まで補給線を構成し、主として3回にわたる輸送船団をもって米軍の航空勢力圏を突破して補給を継続しようと必死の戦い、補給戦を続けたが、この試みはすべて失敗した。このため、駆逐艦、潜水艦による輸送を行い、多少は糧食などを揚陸したが、ガダルカナル島内の局地輸送が貧弱なため、第一線にはほとんど補給品が届くことはなかった。

なぜこのような状況になったのか、最大の原因は、海軍が米軍の構成した海岸堡を攻撃するための戦力と補給をガダルカナル島に揚陸させる責務を果たせなかったことにある。ウィンストン・チャーチル（Sir Winston Leonard Spencer Churchill）は、ノルマンディー上陸作戦のとき「海軍の任務は、陸軍を安全に海峡を横断せしめ、あらゆる方法をもって上陸を支援し、その後は敵と海との危険に拘わらず、増援軍と補給

とが適時に着くことを確保することにあった」[80]と述べた。連合艦隊は、輸送船団の掩護と米機動部隊の撃破という二つの目的を同時に追求した。しかし、実際に連合艦隊が主な目的として追求したのは機動部隊である第3艦隊による米機動部隊の撃破であり、そのため輸送船団の掩護は従目的でしかなく、結局、何れも達成出来なかった。だが、全体を大観するに責任は海軍のみではない。ラバウルからガダルカナル島への補給線の構築にあたり、特にその中継地である海運地、ガダルカナル島内局地輸送の稚拙、機械化の遅れ及びこれらの防空処置の欠如は顕著であった。なぜこのようになったのか、それは日本軍自体が、「必要な軍需品を必要な量、必要な時期に必要な場所に存在させる」という補給の重要性を認識し、これを如何に成立させるのか、如何にすれば成立するのかを主動的に考え、陸海軍の統合された作戦と一体的に計画・運用できるよう準備、実践しなかったことにある。

結局、実際に米軍の航空勢力圏下にあるガダルカナル島への補給というものは、陸海軍の戦力を分散させて成功するほど生易しいものではなかったのである。

（防衛研究所）

80 ウィンストン・チャーチル（毎日新聞社翻訳委員訳）『チャーチル回顧録　第20巻』（毎日新聞社、1954年）158頁。